

大学生における親密な人間関係と人格発達

古 屋 健 (立正大学心理学部)

八 木 善 彦 (立正大学心理学部)

Intimate relationships and personality development in university students

Takeshi FURUYA (*Faculty of Psychology, Rissho University*)

Yoshihiko YAGI (*Faculty of Psychology, Rissho University*)

Abstract

This study examined the connection between the development of personality and intimate relationships in late adolescence. Four hundreds and twenty-four university students were administered MEIS (Multidimensional Ego Identity Scale), the intimacy sub-scale of EPSI (Erikson Psychosocial Stage Inventory), as well as the intimacy scale developed by Tani & Harada (2011). The results of correlational analysis and covariation structure analysis revealed that higher level of intimacy lead to higher ego-identity achievement and closer relationships with friends. However, the closeness in friendship was weakly related to the ego-identity formation. The students having romantic partner showed higher scores on two intimacy scales than those without. The closeness of their romantic relations significantly correlated with the scores of the intimacy scales. When the ego-identity was in an immature state, higher level of conformity, anxiety and apprehension were observed in intimate relationships with friends and romantic partner.

Key words : Erikson, ego-identity, intimacy, friendship, romantic relationship

問 題

生涯発達の観点から見ると、青年期後期にある大学生の対人関係は、身近な家族や友人との人間関係が成熟していく一方で、学校、サークル、アルバイトなど幅広いネットワークの中で多様な対人関係を経験するようになるとともに、異性との親密な人間関係のあり方が大きな関心事となる点に大きな特徴がある。親密な人間関係とは、単に身近にいること（物理的近接）や態度や経験を共有しているというだけではなく、相互に好意や愛情を持ち、共感的コミュニケーションや支援・援助の交換がなされるような関係性を指す(Brehm, 1985)。このような関係性は家族、友人、恋人などパーソナルな人間関係を特徴づけ、身近な人々との間の親密な関係はポジティブな出来事や活動が生じる場となることで個人の心理的安寧を高め、またストレスフルな状況下においては物理的・心理的サポート源として心身の健康状態・安寧 (well-being) を維持促進する役割を果たしている。その一方で、他人と親密になることは、自分の弱点を晒し、行動の自由や自分らしさを失い、攻撃を受けたり見捨てられるリスク

を背負うことでもある (Hatfield, 1984)。そのため、青年期において特定異性との間に安定した親密な関係を築くことができるかどうかは、個人の人格の成熟性と密接に関係している。そこで本研究では、大学生における友人・恋人関係と人格発達との関係について検討した。

親密な人間関係は乳幼児期における養育者に対する愛着形成に始まり、やがて児童期には類似他者である同性・同世代の友人関係へと広がっていき、青年期において異質他者である異性関係へと進展していく (Sullivan, 1968)。Sullivan によれば、親子関係のように相手からの保護や養護を期待できる関係とは異なり、友人関係は平等公平な立場にある他者とのギブアンドテイクの関係を基本とするものである。児童期における友人関係は主として同性、同世代で共通の関心や活動の中で行動を共にする仲間集団 (ギャング) であるが、やがて児童期後期 (前思春期) になると特定の個人がおしゃべり友達 (チャム) となり、強い共感で結ばれた親密な人間関係が形成されるようになる。このような関係の中でなされる共人間的妥当性確認 (consensual validation) は価値の内面化を促し、青年期の人格形成

に大きな影響を与えると考えられる。青年後期・成人前期になると性的欲求を自己に統合し、親密な異性関係を形成することが大きな発達課題となる。この課題を達成するためには、自分と類似した同質他者である親友を対象とする共感的な愛情を、異質他者である異性パートナーに向けることができればならない。そのため、友人と親密な関係を築けることは、異性との間に親密な関係を築くための前提条件となる。したがって、青年期後期において友人関係と異性関係の親密さには強い関連があると予想される。

Sullivan と同様に、Erikson (1950, 1959, 1968, 1982) もまた異性との間に親密な関係を築くこと、すなわち性器愛の完成態としての親密性の獲得を成人前期の課題と考えている。Erikson によれば、成人前期において真の意味での親密性が獲得されるためには、青年期の段階で自我同一性が達成されていることが条件となる。自我同一性が未達成または拡散状態にあると、自己犠牲や妥協を要求する異性との親密な関係は自他融合状態や自己喪失不安を引き起こし、最後には親密な接触を回避する孤立状態に陥ると考えられる。青年期後期においては、自我同一性の達成が課題であると同時に、親密性の発達も進むことから、両者の関連についてはこれまでも多くの研究がなされており、おおむね Erikson の仮説を支持する結果が得られている (Orlofsky, Marcia, & Lesser, 1973; Levitz-Jones, & Orlofsky, 1985; Tesch, & Whitbourne, 1982; Whitbourne & Tesch, 1985)。このことから、青年期後期における異性関係の親密さは自我同一性および親密性の達成度と関連していると考えられる。したがって、大学生においては同一性および親密性が達成しているほど恋人との間に安定した親密な関係を持つことができ、自我同一性が不達成な状態にあると十分な親密性が発達しないため、親密な異性関係を回避したり、親密な関係の中で自他融合状態や自己喪失不安を経験しやすいと予想される。

なお、Erikson は青年期後期における友人関係の意義を Sullivan ほどには重視していない。自我同一性とは、自分自身で感じている自分と、他人の目に映る自分、さらには社会規範や社会からの期待とを結びつけて統合することであり、その最終的な解決は個人の選択と決断によって下されるものである。したがって、自我同一性達成への友人からの影響は、あったとしても副次的なものに留まると考えられる。ただし、同一性達成までの過程で社会的役割の混乱が生じると、理想的な人物への過度な同一化や、自分とは異質な他者に対する強い排他的態度や仲間集団への画一的同調傾向が生まれ、身近な人間関係も影響を受けることがある。つまり、自我同一性の状態は友人関係から影響を

受けるというより、友人関係のあり方に影響を与えている可能性がある。

このことは先行研究の知見からも示唆される。大学生における自我同一性の達成度と友人関係の特質との関連については、谷 (2001) が開発した MEIS (Multi-dimensional Ego Identity Scale) を使って実証的な検討がなされているが、いずれも友人関係のあり方が自我同一性に影響を及ぼすとの仮説が立てられていた。安井・谷 (2008) によれば、友人関係の特徴のうち「友人への信頼」と「友人からの肯定的影響」は MEIS の各下位尺度得点と正の相関を、「密着・同調志向」と「やさしさ志向」は負の相関を示し、MEIS 全体得点を基準変数、友人関係尺度を説明変数とした重回帰分析による説明率は 28.7% であった。また、松下・吉田 (2009) は岡田 (1995) の友人関係尺度と MEIS との関連を検討した結果、「気遣い」は MEIS の全下位尺度に対して負の影響を、「関係回避」は自己斉性・対他的同一性尺度に負の、また「積極的」は対自的同一性・心理社会的同一性尺度に正の影響を及ぼすことを明らかにした。ただし、その説明率は 7~14% の範囲にあり、相対的に低いものであった。利用した尺度は異なるが、金子 (1995) も友人との関係の持ち方が「同調的」「隔絶的」であるほど、自我同一性拡散感が強いことを示した。いずれの研究も、友人との間に親身で内面的な信頼関係が形成されているほど自我同一性達成度は高く、逆に友人との間に遠慮や気遣いを感じ表面的な関係しか持てないと同一性達成度が低いことを示している。ただし、両者の間に期待された関連を見いだせなかった研究や (金子, 1989)、女性だけに有意な関連が認められた研究もある (宮下・渡辺, 1992; 宮下, 1998)。これらの結果は、友人関係と同一性の関連性は、関係の親密さより気遣いや同調傾向といったネガティブな特徴で強いことを示唆している。

本研究では、大学生を対象に親密な人間関係の特徴と自我同一性および親密性の発達状態を調査し、両者の関係について検討した。以上の先行研究から、自我同一性と親密性については、自我同一性の達成度が高いほど、親密性の達成度は高いであろうと予想できる。また、同性友人との関係形成は異性との関係を形成する上で必須のプロセスと考えられることから、親密な友人関係は親密性達成を促進すると考えられる。なお、自我同一性と友人関係については、先行研究にあるような友人関係の持ち方が自我同一性達成に影響を与えるとする仮説は採用せず、青年期後期において両者は独立か、あるいは自我同一性が友人関係に影響を与えるとする仮説を検討する。この仮説では、自我同一性の達成度が高いほど、安定した親密な友人関係を持つことができるかと予想される。

恋人関係については、親密性が高いほど安定した親密な恋人関係を持てると考えられる。過去の研究によれば、大学生で特定の異性（恋人）と交際している者は男性で約四分の一、女性で約三分の一であることから、この仮説は恋人の有無による比較と、恋人がいる人との間の恋人関係の特徴との関係を見ることで検討することになる。すなわち、恋人のいる人はいない人より親密性の達成度が高いと予想され、恋人のいる人については、親密性の達成度が高いほど恋人関係も安定し親密になると予想される。また、青年期後期においては自我同一性も恋人関係に影響を与え、自我同一性達成度が低いと恋人関係において自己喪失の不安を経験しやすいことが予想される。

なお、自我同一性と親密性については、先行研究において既に信頼性が高く、妥当性も確認されている尺度が開発されてきた。しかし、本研究で検討したい特定の友人や恋人との関係の親密さや不安などの特徴について総合的に測定できる尺度はこれまで開発されていない。そこで、本研究では既存の友人関係や恋人関係に関する尺度を利用するとともに、独自の尺度を作成した。

方 法

調査対象者

東京都内の大学に通う大学生で、18歳から27歳までの男性201名、女性223名の計424名である。心理学関係科目の受講生に対して、講義の一部を利用して協力を依頼し、協力に応諾してくれた学生に質問紙を配布し、回答を求めた。なお、一部回答漏れのある場合も、分析に含めているため、尺度によって調査者数は異なっている。

質問紙の構成

質問紙は、人格発達に関する質問項目、友人関係に関する質問項目及び恋人関係に関する質問項目の3つのパートから構成された。

1. 人格発達尺度

人格発達については、自我同一性尺度と親密性尺度を利用して自我同一性及び親密性の達成度を測定した。

自我同一性達成度は谷（2001）による MEIS を利用して測定した。この尺度は、対自同一性、対他同一性、心理社会的同一性および自己斉一性・連続性の4つの下位尺度各5項目計20項目から成り、信頼性と妥当性は谷によって確認されている。

親密性達成度の測定には2つの尺度を利用した。ひとつは、中西と佐方（2001）が日本語版を作成した EPSI (Erikson Psychosocial Stage Inventory；エリク

ソン心理社会的段階目録検査) 中の親密性を測定するための7項目から成る下位尺度である。内的一貫性を示すクロンバックの α については .629 という値が報告されている。中川と佐方はこの尺度が「自分を見失うことなく、他者と親密な付き合いができ、孤独感を感じられないでいられる状態 (p.367)」を意味している。なお、原版では回答を5件法で求めているが、本研究では他の尺度とそろえて7件法とした。

もうひとつは谷と原田（2011）の親密性尺度である（以下、谷・原田親密性尺度と記す）。谷と原田は EPSI など従来の尺度を批判的に検討し、Erikson (1950, 1959, 1968, 1982) の親密性の定義により忠実で内容妥当性の高い尺度の開発を試みた。この尺度では、親密性を「呑み込まれ不安を感じることなく、相互の欲求を満足させ合うという相互性をもった深い人間関係を築くことのできる特性」と定義し、相互性と呑み込まれ不安を測定する10項目（7件法）から構成され、クロンバックの α については .87 の値が報告されている。

2. 友人関係尺度

友人関係については、最も親密な友人一人を考えた上で、その友人との関係性について回答するように求めた。質問項目は、既存の尺度から石本ら（2009）の同調傾向尺度9項目、金政と大坊（2003）の愛情の三角理論尺度の下位尺度であるコミットメント尺度を友人関係用に改変した7項目、および古屋（1999）で使用された友人関係に関する質問項目から抜粋した親密性、サポート、共行動などに関する34項目の計51項目である。回答は7件法による。

3. 恋人関係尺度

恋人関係については、まず恋人の有無について回答を求め、「いる」と回答した場合にはその恋人との関係性に関する質問項目に、「いない」と回答した場合には異性と交際することに関する質問項目に回答するように求めた。なお、本研究では「有り」と回答した対象者だけを分析対象とした。

恋人との関係性に関する質問項目は、予備調査を踏まえて作成・選択された親密性、独占欲、呑み込まれ不安に関する62項目から成る。なお、その中には友人関係との比較ができるよう石本ら（2009）の同調傾向尺度および金政と大坊（2003）の愛情の三角理論尺度からコミットメント尺度を恋人関係用に改変したものが含まれている。回答は他の質問項目と同じく7件法とした。

結 果

尺度構成

1. 人格発達尺度

自我同一性の達成度を測定する MEIS の 4 つの下位尺度各 5 項目のクロンバックの α は .812 から .859 の範囲にあり、十分に高い内的一貫性を示した。また、親密性尺度についても谷・原田親密性尺度 10 項目の内的一貫性は $\alpha = .846$ と十分に高い値を示した。しかし、EPSI 尺度の親密性尺度 7 項目はクロンバックの α が .671 と低く、1 項目を削除して使用した ($\alpha = .684$)。なお、これらの値はそれぞれ谷と原田 (2011) および中西と佐方 (2001) が報告している値に近いものであった。

自己発達尺度の下位尺度間にはすべて有意な正の相関が認められた ($p < .01$)。2 つの親密性尺度間には全体で .763 の非常に強い相関があり、MEIS 下位尺度間の相関は .250 ~ .599 の範囲にあった。また、親密性尺度と MEIS との間には .364 ~ .523 の中程度の相関が認められた。

2. 友人関係尺度

友人関係尺度のうち同調傾向尺度 9 項目についてはクロンバックの α が .816 で 1 項目削除 ($\alpha = .825$) して使用した (表 1)。友人コミットメント尺度は 7 項目で $\alpha = .839$ であったが、これも 1 項目削除 ($\alpha = .858$) し 7 項目を使用した (表 2)。

その他の項目 34 項目については因子分析 (主因子法プロマックス回転) の結果、4 因子が抽出された (表 3)。第 1 因子は「人生や生き方のことについて真剣に話をすることがある」や「私が落ち込んでいるとき、なぐさめくれる」などの項目で負荷量が高いことから

表 1 同調傾向尺度の項目

項 目	友人 (n=421)	
	M	SD
できるだけ〇〇と同じように行動したい	3.2	1.55
何をするにも〇〇と一緒にだと安心する	4.1	1.63
〇〇から嫌われたくないので、話をあわせることがある	2.7	1.45
〇〇と同じことをしていないと不安だ	2.4	1.43
〇〇の意見を聞いて、自分の意見を変えることがある	3.9	1.58
〇〇と考えが違ったときは、自分の考えに従って行動する*	2.9	1.18
〇〇と話が合わないと不安だ	2.9	1.50
〇〇と意見が対立するのがこわい	2.9	1.54
〇〇と意見が一致すると安心できる	4.8	1.51
クロンバックの α	.825	

*は逆転項目で尺度化にあたり削除された項目

表 2 コミットメント尺度の項目

項 目	友人 (n=421)		恋人 (n=129)	
	M	SD	M	SD
〇〇との関係を終わらせることなど私には考えられない	5.5	1.52	5.2	1.42
〇〇のいない生活など考えられない	4.3	1.61	4.7	1.66
〇〇への強い責任をこの先もずっと感じると思う	4.3	1.56	4.4	1.74
その友人とは強い絆 (きずな) で結ばれていると思う	4.9	1.41	4.7	1.92
私にとって〇〇との関係は何よりも大切である	5.0	1.54	5.0	1.69
私は〇〇に対して何らかの責任を感じている*	3.5	1.62	4.5	1.71
〇〇との関係は何ものも妨害できない	4.1	1.59	4.9	1.76
クロンバックの α	.858		.866	

*は尺度化にあたり削除された項目

表 3 友人関係尺度の因子分析結果 (主因子解プロマックス回転)

項 目	因子			
	共感	親和	互助	比較
その友人は、私にいやなことがあった時、一緒に悲しんでくれる	.822	-.068	.074	.020
その友人とは、人生や生き方のことについて真剣に話をすることがある	.815	.074	-.175	-.039
その友人と、将来の夢や希望について話しをすることがある	.722	.098	-.176	.045
その友人は、私の良い点を見つけてはめてくれる	.620	.035	.093	.093
その友人は、私に何かよいことがあったとき、一緒に喜んでくれる	.601	.200	.095	.039
その友人が勉強していると、自分もやる気が出てくる	.568	-.109	-.063	.114
その友人は、私が悩んでいるとき心配してくれる	.566	.220	.059	.074
その友人は、私が落ち込んでいるとき、なぐさめくれる	.561	.193	.137	-.075
その友人には他の人に言えないような悩みごとを相談できる	.430	.420	-.045	-.099
その友人は、私の長所も短所も理解してくれている	.422	.323	.083	-.141
その友人が悩んでいるとき心配になる	.408	.302	.086	.146
私はその友人の長所や短所を理解してあげていると思う	.353	.288	.154	-.067
その友人と一緒にいると楽しい	-.068	.867	.014	.073
その友人のことを信頼している	.118	.792	-.050	-.008
その友人とは、学校を卒業してもずっと友だちでいたい	-.019	.739	.071	.052
その友人と一緒に話をしていると元気が出てくる	.080	.694	.065	.137
その友人と一緒にいると安心する	.133	.598	.109	.090
その友人に対しては、自分が考えたことや感じたことを正直に話せる	.259	.588	-.030	-.136
その友人とは、身近なできごとについて話しあえる	.071	.584	.142	-.035
その友人とは、何でも言い合える	.251	.554	.012	-.219
その友人は、私の意見にたいいてい賛成してくれる	.069	-.223	.826	.013
その友人は、たいいてい私の味方になってくれる	.074	-.022	.761	.034
私はたいいていその友人の味方になる	-.190	.238	.689	-.026
その友人は、私が頼んだことはたいいてい引き受けてくれる	.085	.047	.669	-.089
その友人は、私の誘いにはたいいてい付き合ってくれる	-.076	.124	.658	-.046
その友人からの誘いにはたいいていつき合う	-.188	.295	.637	.059
その友人から頼まれたことはたいいてい引き受ける	-.016	.098	.610	-.061
その友人は、私と考え方や感じ方が似ている	.170	.175	.216	.096
その友人と比べて劣等感を感じることもある	-.016	.057	-.239	.699
その友人のことをうらやましく思うことがある	-.029	.406	-.141	.618
その友人の行動が気になる	.184	-.282	.293	.501
その友人の服装が気になる	.271	-.308	.123	.415
その友人は私と同じ趣味を持っている	-.252	.236	.160	.272
何かを買うとき、その友人の意見を聞くことがある	.070	.128	.162	.216
固有値	11.212	11.381	9.826	2.447
因子相関行列	1	2	3	4
2	.707			
3	.653	.637		
4	.218	.138	.273	

友人共感因子と命名した。第2因子は「一緒にいると楽しい」や「信頼している」といった項目で負荷量が高く、友人親和因子と呼ぶことができる。第3因子は「たいいて私の味方になってくれる」や「たいいて味方になってあげる」等の項目で負荷量が高いことから、相互に援助やサポートを授受し合う関係性を示す友人互助因子と考えられる。最後に、第4因子は「劣等感を感じることもある」や「うらやましく思うことがある」で負荷量が高いことから友人比較因子とした。

各因子で負荷量が高い項目の評定値の和を求めて、各因子の特徴を示す下位尺度とした。クロンバックの α により内の一貫性を検討し、最終的に友人共感尺度は12項目($\alpha=.925$)、友人親和尺度は8項目($\alpha=.924$)、友人互助尺度7項目($\alpha=.883$)、友人比較尺度4項目($\alpha=.657$)が構成された。

3. 恋人関係尺度

恋人関係尺度については、恋人がいると回答した対象者だけが回答しているため、有効回答者数は男性52名、女性77名の計129名である。回答者全体の中で占める比率は男性25.9%、女性34.5%である。大学生を対象とした類似した先行研究でも、調査時点で恋人がいると回答する者は男性で約四分の一、女性で約三分の一程度となっており、標準的な値となっている。

友人関係尺度と同様に、恋人関係尺度についてもまず同調傾向尺度(表1)と恋人コミットメント尺度(表2)について検討した。コミットメント尺度は7項目で $\alpha=.839$ であったが、1項目削除($\alpha=.858$)した6項目を使用した。他方、同調傾向尺度9項目では項目を削除して調整しても $\alpha=.737$ と低いため独立して使用せず、他の項目と一緒に扱うことにした。

表4 恋人関係尺度で平均が6以上の9項目

項目	N	平均	SD	主成分 負荷量
恋人と一緒にいると楽しい	129	6.40	1.03	.785
恋人とは、身近なできごとについて話しあえる	129	6.35	0.92	.782
恋人は、私に何かよいことがあったとき、一緒に喜んでくれる	129	6.32	0.91	.652
恋人が悩んでいると心配になる	129	6.26	0.98	.734
恋人のことを信頼している	129	6.19	1.08	.867
恋人と一緒にいると安心する	129	6.13	1.14	.849
恋人は、私が落ち込んでいるとき、なぐさめくれる	129	6.12	1.04	.750
恋人と一緒に話をしていると元気が出てくる	129	6.04	1.11	.872
恋人は、私が悩んでいるとき心配してくれる	129	6.00	1.17	.734
クロンバックの α		.920		

表5 恋人友人関係尺度の因子分析結果
(主因子解プロマックス回転)

	因子							
	開示 理解	支援 提供	独占 密着	支援 受容	呑み 込め	信頼 準拠	恋人 比較	
恋人とは、何でも言い合える	.812	-.335	.128	.104	-.071	-.027	-.092	
恋人とは、人生や生き方のことについて真剣に話をすることがある	.808	.150	-.224	-.240	.181	.168	-.073	
恋人と、将来の夢や希望について話をする	.675	.327	-.155	-.240	-.009	.020	-.056	
恋人に対しては、自分が考えたことや感じたことを正直に話せる	.675	-.087	.036	.098	-.342	-.043	-.100	
恋人には他の人に言えないような悩みごとを相談できる	.618	.067	.211	-.153	-.058	.155	.014	
恋人は、私の良い点をみつけてほめてくれる	.539	.151	-.223	.262	-.163	-.084	.190	
恋人を思い出すぐだけで心が安らぐよう落ち着いていられる	.512	-.020	.016	-.003	.063	.387	.093	
恋人は、私の長所も短所も理解してくれている	.457	.016	-.121	.135	-.139	.133	-.010	
恋人が勉強していると、自分もやる気が出てくる	.439	-.164	-.212	.032	.061	.413	.192	
恋人からの誘いにはたいいてつき合う	-.048	.872	-.110	.049	-.099	-.175	.069	
恋人から頼まれたことはたいいて引き受ける	-.114	.675	-.014	-.004	-.115	.207	.172	
私はたいいて恋人の味方になる	-.061	.672	.082	.044	.089	.070	-.070	
恋人とは、学校を卒業してもずっと恋人でいたい	.073	.467	.146	.098	-.161	.117	-.035	
恋人と意見が一致すると安心できる*	.167	.402	.041	-.068	.085	.018	-.049	
恋人にはいつも自分を見ていてほしい	.202	.317	.251	.166	.241	-.151	-.009	
他の人からは批判されたとしても、恋人から褒めてもらえると安心する	.282	.314	.058	.087	.064	.050	.094	
恋人だとしても距離感は大切にしたい	.165	-.079	-.757	.198	.123	-.089	.283	
恋人と同じことをしていないと不安だ*	.000	-.151	.682	.070	.256	.048	.062	
できるだけ恋人と同じように行動したい*	.104	-.088	.662	.118	.055	-.017	.155	
恋人の時間を独占したくなる	.094	.078	.627	-.019	.190	-.391	-.028	
恋人だとしてもプライバシーは守って欲しい	.173	.045	-.591	.160	.156	-.081	.123	
恋人さえ認めてくれれば、他の人からどう思われようとかまわない	-.190	.157	.537	.032	-.097	.101	.296	
恋人から放っておかれると不安になる	.310	.108	.420	.058	.078	-.125	-.094	
何をしても恋人と一緒にだと安心する*	.137	.282	.339	.102	.027	.220	.034	
恋人は、私の意見にたいいて賛成してくれる	-.133	-.062	-.014	.784	.062	.156	.034	
恋人は、たいいて私の味方になってくれる	-.114	.025	.111	.764	-.090	.013	-.083	
恋人は、私が頼んだことはたいいて引き受けてくれる	.133	.059	-.109	.749	.168	.014	.207	
恋人は、私の誘いにはたいいて付き合ってくれる	.099	.281	-.208	.531	-.012	.093	-.151	
恋人と考えが違ったときは、自分の考えに従って行動する*	-.088	.064	-.201	.482	-.063	-.413	-.026	
恋人は、私にいやなことがあった時、一緒に悲しんでくれる	.283	.064	.141	.290	-.274	-.053	.028	
恋人と一緒にいると自分なくなってしまう気がする	.004	-.100	.008	.031	.777	.153	-.061	
恋人から嫌われたくないので、話をあわせることがある*	-.127	.005	-.084	-.070	.776	.382	-.085	
恋人の前では本当の自分が出せない	-.132	-.132	-.087	.063	.674	-.059	.142	
恋人と話が合わない不安だ*	-.069	-.028	.220	.222	.559	.136	.006	
恋人の言うことに振り回されてる気がする	.000	.287	.091	-.240	.426	-.033	.057	
恋人は、私と考え方や感じ方が似ている	.315	-.165	-.012	.203	-.010	.499	.064	
恋人は私と同じ趣味を持っている	-.054	.099	-.079	.132	.264	.482	-.041	
この人しかいないと思える恋人に出会えたと思う	.346	.074	.173	-.041	-.076	.474	.081	
安心して恋人の世話にはなれない方だ	-.146	.035	-.107	.140	-.027	-.468	.250	
恋人の意見を聞いて、自分の意見を変えることがある*	.035	.079	-.076	.142	.343	.418	-.072	
私は恋人の長所や短所を理解してあげていると思う	.052	.290	.005	.139	-.125	.330	-.165	
恋人の意見は全て正しく思える	-.046	.078	.188	.191	.193	.247	.200	
つい自分が恋人におさわしいかどうか考えてしまう	.152	.043	-.028	-.152	.004	-.076	.703	
自分のために恋人に何かやってもらうのは苦手だ†	-.328	.007	-.098	.061	-.174	-.014	.665	
自分は恋人よりも劣っているようで、引け目を感じる	.046	.041	-.069	-.192	.101	.097	.653	
自分と恋人がつり合っていない気がする	.035	.021	.052	-.110	.139	-.273	.560	
固有値	8.792	7.955	6.228	6.351	4.518	3.533	3.598	
*は同調傾向尺度項目	1	2	3	4	5	6	7	
†は尺度化の際に削除された項目	2	.599						
	3	.389	.548					
	4	.542	.466	.261				
	5	-.243	-.052	.257	-.204			
	6	.408	.423	.281	.337	-.234		
	7	.121	.220	.284	.214	.450	.152	

恋人コミットメント尺度項目を除く恋人関係尺度項目55項目についてまず基礎統計の結果を検討したところ、平均値が7段階評定で6を超えた項目が9項目あった(表4)。これらの項目は相互に相関が高く、主成分分析の結果、第1主成分の固有値は5.526で説明率は61.4%となり、一次元性が確認できたことから、これらの項目を独立した尺度とした。内的一貫性を示すクロンバックの α は.920と非常に高かった。項目内容は親密な恋人関係の特徴を記述したものとなっており、恋人親密度尺度とした。

残る46項目について因子分析を行ったところ、7因子が抽出された(表5)。第1因子は「何でも言い合える」や「私の良い点をみつけてはめてくれる」などの項目で負荷量が高いことから開示理解因子と解釈した。第2因子は「誘いにはたいていつき合う」や「恋人の味方になる」などの項目で負荷量が高く支援提供の因子と命名した。これに対応しているのが第4因子で、「たいて賛成してくれる」や「私の味方になってくれる」などの項目で負荷量が高いことから支援受容の因子と考えられる。友人関係尺度では、支援を相互に授受し合う関係性を示す互助因子としてひとつにまとまっていたが、恋人関係では支援の提供と受容が別の因子として抽出された。

第3因子は「距離感は大切にして欲しい(逆転項目)」や「時間を独占したくなる」などの項目で負荷量が高いことから独占密着因子とした。第5因子は「一緒にいると自分がなくなってしまう気がする」や「本当の自分が出せない」といった項目で負荷量が高く呑み込まれ不安因子と解釈できる。第6因子は「考え方や感じ方が似ている」や「この人しかいないと思える」などの項目で負荷量が高いことから信頼準拠因子と解釈した。最後の第7因子は「自分が恋人にふさわしいかどうか考えてしまう」や「引け目を感じる」といった項目で負荷量が高く、恋人比較因子とした。

以上の7因子で負荷量が高い項目の評定値の和を求めて、各因子の下位尺度を構成した。内的一貫性を検討した結果、最終的に開示理解尺度は9項目($\alpha=.874$)、支援提供尺度は7項目($\alpha=.828$)、独占密着尺度8項目($\alpha=.826$)、支援受容尺度5項目($\alpha=.828$)、呑み込まれ不安尺度5項目($\alpha=.774$)、信頼準拠尺度7項目($\alpha=.734$)、恋人比較尺度3項目($\alpha=.730$)が構成された。信頼準拠尺度と恋人比較尺度でやや低いものの、使用に耐えられるものと判断した。

恋人の有無による得点差の検定

1. 人格発達尺度得点

2つの親密性尺度および MEIS 下位尺度得点について、年齢を年少群(20歳未満)と年長群(20歳以上)

表6 親密性尺度得点の平均、SD と分散分析結果

性別	恋人有無	EPSI 親密性			谷・原田親密性	
		N	M	SD	M	SD
男子	無し	148	26.6	5.62	44.6	9.83
	有り	52	30.3	5.03	53.6	7.80
	総和	200	27.6	5.70	47.0	10.13
女子	無し	146	27.8	5.04	47.1	8.43
	有り	77	29.2	5.53	52.1	8.57
	総和	223	28.3	5.24	48.9	8.78
総和	無し	294	27.2	5.37	45.9	9.23
	有り	129	29.7	5.34	52.7	8.27
	総和	423	28.0	5.47	48.0	9.48
分散分析結果		df	F	p	F	p
要因	性別	1/415	0.001	ns	0.028	ns
	恋人有無	1/415	16.204	**	50.594	**
	交互作用	1/415	4.033	*	5.360	*

*p<.05 **p<.01

表7 MEIS 下位尺度得点の平均、SD と分散分析結果

		対自同一性				対他同一性				自己斉一性・ 連続性		心理社会的 同一性	
性別	恋人有無	N	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
男子	無し	149	19.9	6.18	18.0	5.60	21.4	6.56	20.0	5.86			
	有り	52	22.0	5.04	19.6	5.44	23.8	6.52	22.4	5.29			
	総和	201	20.5	5.96	18.4	5.59	22.0	6.62	20.6	5.80			
女子	無し	146	18.8	5.51	19.1	5.46	22.0	6.16	19.7	4.78			
	有り	77	19.3	6.14	19.9	5.94	23.3	7.60	20.9	5.16			
	総和	223	19.0	5.72	19.4	5.63	22.4	6.71	20.1	4.94			
総和	無し	295	19.4	5.87	18.5	5.55	21.7	6.36	19.9	5.35			
	有り	129	20.4	5.85	19.8	5.72	23.5	7.17	21.5	5.25			
	総和	424	19.7	5.88	18.9	5.63	22.2	6.66	20.4	5.36			
分散分析結果		df	F	p	F	p	F	p	F	p			
要因	性別	1/416	9.224	**	2.588	ns	0.020	ns	1.980	ns			
	恋人有無	1/416	2.071	ns	3.711	ns	7.340	**	7.149	**			
	交互作用	1/416	1.218	ns	0.174	ns	0.453	ns	0.558	ns			

*p<.05 **p<.01

に分けた上で、年齢群×性別×恋人有無による3要因分散分析を行った。その結果、年齢群については主効果・交互作用ともに認められなかった。2つの親密性尺度(表6)ではともに恋人有無の主効果と恋人有無×性の交互作用が有意であった。恋人有り群の方が無し群より高く、また女性より男性でその差が大きかった。MEIS(表7)については対自同一性尺度で有意な性差が認められ、女性より男性で高かった。自己斉一性・連続性尺度と心理社会的同一性では恋人有無の主効果が有意で、どちらも恋人無し群より有り群で高かった。対他同一性では主効果、交互作用ともに有意ではなかった。

2. 友人関係尺度

友人関係尺度得点についても、年齢について年少群(20歳未満)と年長群(20歳以上)に分けた上で、年齢

表8 友人関係尺度得点の平均、SD と分散分析結果

性別	恋人有無	友人コミットメント			同調傾向		友人共感		友人親和		友人互助		友人比較	
		<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
男子	無し	148	26.5	6.99	26.2	8.06	55.8	12.92	42.5	9.37	33.3	7.10	24.1	6.21
	有り	52	27.7	6.47	25.4	9.45	59.4	13.04	46.3	6.93	34.1	6.80	23.5	5.80
	総和	200	26.8	6.86	26.0	8.42	56.7	13.01	43.5	8.94	33.5	7.02	23.9	6.10
女子	無し	144	29.0	7.31	28.0	7.33	64.1	11.47	46.7	6.75	35.9	6.68	26.4	6.01
	有り	77	29.8	6.55	26.7	8.93	68.8	10.29	48.6	6.84	36.4	6.28	26.0	5.92
	総和	221	29.3	7.05	27.5	7.92	65.7	11.28	47.4	6.83	36.1	6.53	26.3	5.97
総和	無し	292	27.8	7.24	27.1	7.74	59.9	12.89	44.6	8.43	34.6	7.02	25.2	6.21
	有り	129	28.9	6.57	26.2	9.13	65.0	12.31	47.7	6.94	35.5	6.56	25.0	5.98
	総和	421	28.1	7.06	26.8	8.19	61.4	12.92	45.5	8.12	34.9	6.89	25.1	6.14
分散分析結果		<i>df</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	<i>F</i>	<i>p</i>
要因	性別	1/413	9.73	**	3.56	ns	42.04	**	13.17	**	12.13	**	14.14	**
	恋人有無	1/413	1.54	ns	1.51	ns	9.33	**	9.90	**	0.32	ns	0.59	ns
	交互作用	1/413	0.07	ns	0.00	ns	0.01	ns	1.58	ns	0.07	ns	0.00	ns

*p<.05 **p<.01

群×性別×恋人有無による3要因分散分析で平均値の差の検定を行った結果、人格発達尺度と同様に年齢要因には主効果・交互作用ともに認められなかった。年齢別・恋人有無別の各尺度の平均値を表8に示した。まず、同調傾向尺度を除く5つの下位尺度得点には有意な性差が認められ、すべて男性より女性で高かった。恋人有無の主効果が認められたのは共感尺度と親和尺度で、いずれも恋人無し群より有り群で高かった。同調傾向尺度には有意な主効果・交互作用は認められなかった。

友人関係と親密性

1. 相関分析

自己発達尺度と友人関係尺度との相関を検討した結果(表9)、2つの親密性尺度はコミットメント、共感、親和、互助尺度と有意な中程度の正の相関を示した。また、MEISの心理社会的同一性も親和性尺度と比較すると弱いものの、コミットメント、共感、親和、互助尺度と正の相関を示した。また、対自同一性、対他同一性でもコミットメント、共感、親和尺度との間に弱い正の相関が認められた。友人関係におけるこれらの特徴は親密性の達成と強く関わり、自我同一性の達成とも弱い関わりがあると言える。他方、対自同一性や自己斉性・連続性尺度では同調傾向、友人比較尺度との間に負の相関があり、自我同一性の拡散状態が友人関係における同調行動や、劣等感・引け目といったネガティブ感情の経験と関係していることが示唆される。

次に、自我同一性と友人関係が親密性達成に及ぼす影響を検討するために、親密性尺度を従属変数、性、MEIS下位尺度および友人関係尺度を独立変数とする重回帰分析を行った。その結果(表10)、EPSI親密性尺度と谷・原田親密性尺度ともに、MEISの対他同一

表9 人格発達尺度と友人関係尺度の相関係数

		EPSI 親密性		谷・原田 親密性		対自 同一性		対他 同一性		自己斉性・連続性		心理社会的同一性	
		全体(421)	男性(200)	全体(421)	男性(200)	全体(421)	男性(200)	全体(421)	男性(200)	全体(421)	男性(200)	全体(421)	男性(200)
友人コミットメント	全体(421)	.372**	.448**	.105*	.158**	.006	.148**						
	男性(200)	.364**	.419**	.142*	.072	-.037	.165*						
	女性(221)	.369**	.461**	.117	.210**	.033	.154*						
同調傾向	全体(421)	-.056	-.053	-.181**	-.101*	-.243**	-.096						
	男性(200)	-.036	-.044	-.176*	-.077	-.167*	.026						
	女性(221)	-.090	-.084	-.169*	-.141*	-.324**	-.224**						
友人共感	全体(421)	.421**	.515**	.103*	.163**	.027	.214**						
	男性(200)	.358**	.468**	.185**	.064	.031	.271**						
	女性(221)	.500**	.564**	.125	.227**	.002	.216**						
友人親和	全体(421)	.469**	.560**	.112*	.190**	.102*	.214**						
	男性(200)	.484**	.579**	.212**	.159*	.135	.284**						
	女性(221)	.450**	.519**	.066	.198**	.054	.161*						
友人互助	全体(421)	.263**	.326**	.084	.064	-.042	.158**						
	男性(200)	.243**	.324**	.106	.027	-.034	.172*						
	女性(221)	.267**	.301**	.114	.070	-.065	.169*						
友人比較	全体(421)	-.076	-.006	-.218**	-.056	-.277**	-.175**						
	男性(200)	-.156*	-.093	-.272**	-.096	-.341**	-.166*						
	女性(221)	-.026	.042	-.131	-.054	-.242**	-.174**						

*<.05 **<.01

表10 親密性尺度を基準変数、MEISと友人関係尺度を説明変数とする重回帰分析結果(ステップワイズ)

説明変数	EPSI親密性尺度				谷・原田親密性			
	β	SE	標準化β	t	β	SE	標準化β	t
(定数)	6.632	1.460			4.762	2.348		2.028*
性別								
対自同一性	.136	.041	.146	3.339**	.158	.065	.098	2.444*
対他同一性	.271	.038	.279	7.089**	.467	.070	.279	6.660**
自己斉性					.201	.064	.141	3.117**
心理社会的同一性	.194	.049	.190	4.007**	.182	.078	.104	2.352*
友人コミットメント								
友人同調傾向								
友人共感	.052	.026	.122	1.982*	.146	.041	.200	3.560**
友人親和	.199	.041	.294	4.891**	.368	.064	.317	5.759**
友人互助								
友人比較	-.106	.035	-.119	-3.026**	-.106	.056	-.069	-1.888†
R	.699				.761			
R ² 乗	.488				.579			
adj. R ² 乗	.481				.572			

†p<.10 *p<.05 **p<.01

性、対自同一性および心理社会的同一性が正の影響を与え、また友人関係尺度の共感と親和が正の、友人比較が負の影響を与えていた。また、谷・原田親密性尺度では自己斉一性・連続性からも正の影響が認められ、相対的に EPSI 親密性尺度より回帰モデルの説明率は高かった。

2. 共分散構造分析

以上の相関分析の結果を踏まえて、自我同一性と友人関係が親密性達成に及ぼす影響に関する仮説モデルを立て、共分散構造分析により検討した。

まず MEIS が想定する自我同一性の4つの側面を、それぞれ下位尺度3項目を観測変数とする潜在変数とした。友人関係については共感、親和、互助尺度を観測変数とする「友人親密さ」と、友人比較と同調傾向を観測変数とする「友人懸念」の2つの潜在変数を置いた。親密性については2つの親密性尺度を観測変数とした。

モデル構築の基本仮説は以下の通りである。

仮説1：自我同一性は友人懸念に対して負の効果を持つ。

仮説2：自我同一性は親密性に対して正の効果を持つ。

仮説3：友人関係親密さは親密性に対して正の、友人懸念は負の効果を持つ。

仮説4：自我同一性が友人懸念や親密性に及ぼす影響は同一性の4側面で異なる。

なお、自我同一性と友人親密さとの関係については、相互に独立で相関関係を想定するモデルと、同一性が友人親密性に影響を与えるとするモデルの2通りの仮説で検討した。その結果、わずかに前者のモデルの方が適合度が高かった(図1)。なお、後者モデルの適合

度指標は、 $\chi^2=294.874$ ($df=136$, $p<.001$), $GFI=.930$, $AGFI=.902$, $RMSEA=.053$, $AIC=402.874$ である。なお、分析の過程で仮説にはない測定誤差間の相関を想定すると適合度が高まること示唆されたことから、同調傾向と友人親和および同調傾向と友人互助の誤差間相関がモデルに組み込まれている。

次に、男女それぞれの資料にこのモデルを当てはめて分析した。その結果、男性ではモデルの仮定したパスすべてについて有意な係数が認められた。しかし、女性では友人懸念から親密性へのパス係数(-.09)が有意にならなかった。

恋人関係

1. 恋人関係尺度

恋人関係尺度得点について、年齢について年少群(20歳未満)と年長群(20歳以上)に分けた上で、年齢群×性別による2要因分散分析を行った結果、開示理解尺度でのみ有意な性差が認められ、男性より女性で高かった。他の下位尺度については主効果、交互作用とも認められなかった。

2. 相関分析

恋人関係尺度と自己発達尺度との相関を検討した(表11)。相対的に男性の対象者が少ないため、全体や女性で優位な相関が認められても男性では認められないケースがあった。全体の相関について見ると、親密性では谷・原田親密性尺度が吞み込まれ不安と恋人比較で負の、密着独占尺度以外の他の下位尺度で正の有意な相関を示した。一方、EPSI 親密性尺度は吞み込まれ不安と恋人比較で負の有意な相関を示したが、正の相関が認められたのは親密度と支援受容尺度の2つだけであった。MEIS では、対自同一性、自己斉一性・連続性、

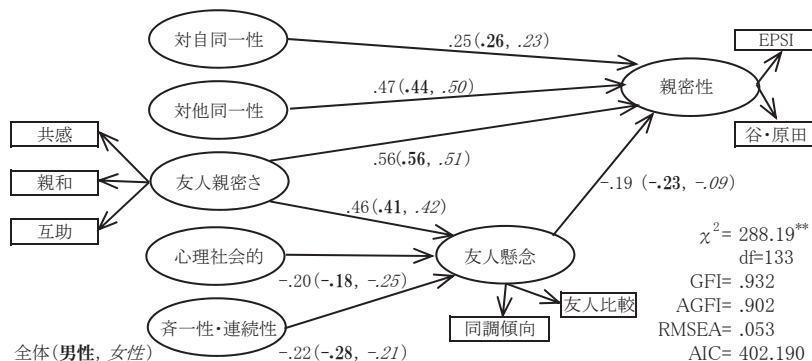


図1 自我同一性と友人関係が親密性に及ぼす影響に関する共分散構造分析結果 (MEISの観測変数、潜在変数間の相関、誤差項および誤差項間相関は省略)

心理社会的同一性の3つの下位尺度において呑み込まれ不安や恋人比較尺度との間に有意な負の相関が認められた。MEISと有意な正の相関が認められた恋人関係尺度はひとつもなかった。この結果は、自我同一性が未達成または拡散状態にあると、恋人関係において不安や引け目といったネガティブな感情を生じやすくするが、関係の親密さには影響を与えないことを示唆している。

友人関係尺度と恋人関係尺度の相関については、友人関係尺度6下位尺度と恋人関係尺度9下位尺度について二次因子分析を行った(表12)。その結果、3因子が抽出された。第1因子は恋人関係の親密さを示す尺度、第2因子は友人関係の親密さを示す尺度がまとまった。第3因子は恋人比較、友人比較、同調傾向および呑み込まれ不安といった関係性への懸念を示す尺度の因子であった。このことから、友人関係の親密さと恋人関係の親密さは独立していること、しかし親密な関係性への懸念については友人・恋人で共通していることが明らかになった。また、恋人関係における密着独占は、恋人親密さ因子だけでなく、関係懸念因子でも大きな正の負荷量が認められた。

最後に、二次因子分析の結果に基づき、個人の因子得点を産出し、人格発達尺度との相関を検討した。そ

の結果を表13に示した。恋人親密さは谷・原田親密性尺度とのみ、友人親密さは2つの親密性尺度と有意な正の相関が認められた。関係懸念の因子はすべての人格発達尺度と負の相関を示し、自我同一性の拡散状態が友人、恋人に限らず親密な人間関係における不安や懸念と関連していることが再確認された。

考 察

本研究では、青年期後期にある大学生を対象に、自我同一性と親密性の発達と、友人関係および恋人関係との関連について検討した。自我同一性は谷のMEISを、親密性についてはEPSIの下位尺度と谷・原田の親密性尺度を利用したが、特定個人を対象とした友人関係や恋人関係の特徴を分析するための尺度がなかったため、本研究では既存のコミットメント尺度と同調傾向尺度に加えて、予備調査を経て新たな尺度の構成

表12 友人関係尺度と恋人関係尺度の二次因子分析結果
(主因子解バリマックス回転)

関係尺度	因子			h ²
	恋人親密さ	友人親密さ	関係懸念	
恋人コミットメント	.860	.032	.179	.773
支援提供	.821	.092	.150	.705
恋人親密度	.798	.122	-.316	.752
開示理解	.792	.146	-.111	.661
信頼準拠	.707	.055	.208	.546
支援受容	.635	.300	-.038	.495
密着独占	.590	-.235	.432	.590
友人親和	.028	.871	-.147	.781
友人共感	.099	.831	.010	.700
友人コミットメント	.075	.814	.151	.691
友人互助	.243	.641	.306	.564
友人同調性	.141	.194	.821	.732
呑み込まれ	-.149	-.139	.764	.625
友人比較	.121	.308	.540	.401
恋人比較	.035	.010	.469	.221
固有値	4.063	2.869	2.305	
分散の%	27.086	19.129	15.364	
累積%	27.086	46.215	61.578	

表13 二次因子得点と人格発達尺度との相関

人格発達	因子得点		
	恋人親密さ	友人親密さ	関係懸念
EPSI 親密性	.127	.321 **	-.317 **
谷原田親密性	.301 **	.282 **	-.415 **
対自同一性	.049	-.053	-.291 **
対他同一性	-.082	.105	-.306 **
自己斉一性・連続性	-.022	-.116	-.474 **
心理社会的同一性	.059	.074	-.231 **

*<.05 **<.01

**p<.01 n=129

表11 人格発達尺度と恋人関係尺度の相関係数

		EPSI 親密性	谷原田 親密性	対自 同一性	対他 同一性	斉一性・連続性	心理社会的 同一性
恋人 親密度	全体 (129)	.239 **	.387 **	.030	.061	.112	.135
	男性 (52)	.313 *	.450 **	.157	-.018	.058	.028
	女性 (77)	.225	.383 **	.013	.112	.161	.267 *
恋人 コミット メント	全体 (129)	.085	.266 **	.046	-.148	-.112	.020
	男性 (52)	.051	.294 *	.089	-.233	-.152	.035
	女性 (77)	.112	.250 *	.015	-.085	-.088	.005
開示理解	全体 (129)	.128	.276 **	.023	-.042	-.071	.091
	男性 (52)	.163	.283 *	.118	-.201	-.217	.059
	女性 (77)	.155	.326 **	.059	.052	.030	.182
支援提供	全体 (129)	.091	.177 *	-.014	-.173 *	-.110	-.029
	男性 (52)	.047	.221	.023	-.244	-.103	-.109
	女性 (77)	.146	.168	.004	-.132	-.112	.063
密着独占	全体 (129)	-.122	-.057	-.007	-.159	-.088	-.113
	男性 (52)	-.079	.001	-.051	-.225	-.114	-.154
	女性 (77)	-.157	-.100	.004	-.116	-.076	-.095
支援受容	全体 (129)	.220 *	.296 **	.027	.022	-.036	.009
	男性 (52)	.114	.277 *	.039	.067	-.030	.088
	女性 (77)	.304 **	.329 **	.064	-.008	-.033	-.014
呑み込ま れ不安	全体 (129)	-.342 **	-.470 **	-.265 **	-.362 **	-.519 **	-.247 **
	男性 (52)	-.344 *	-.542 **	-.221	-.300 *	-.449 **	-.196
	女性 (77)	-.350 **	-.438 **	-.310 **	-.396 **	-.558 **	-.291 *
信頼準拠	全体 (129)	.086	.228 **	.055	-.059	-.055	.094
	男性 (52)	-.022	.010	-.028	-.100	-.102	.074
	女性 (77)	.166	.373 **	.135	-.040	-.024	.131
恋人比較	全体 (129)	-.238 **	-.364 **	-.394 **	-.313 **	-.332 **	-.253 **
	男性 (52)	-.147	-.345 *	-.203	-.277 *	-.230	-.168
	女性 (77)	-.283 *	-.369 **	-.490 **	-.343 **	-.392 **	-.296 **

を試みた。その結果、友人関係については共感（一緒に喜んだり悲しんだりしてくれる）、親和（一緒にいると楽しく安心できる）、互助（互いに味方になる）、友人比較（劣等感や羨望を感じる）の4尺度が構成された。恋人関係については、既存のコミットメント尺度はそのまま利用可能であった。しかし、友人関係用に開発された同調傾向尺度は恋人関係には当てはめられない可能性が示唆されたため、自作項目と合わせて分析した。その結果、評定平均が7件法で6以上の項目を抽出した親密性尺度と、因子分析結果に基づく開示理解、支援提供、支援受容、独占密着、信頼準拠、呑み込まれ不安、恋人比較の7尺度が構成された。信頼性が低かった尺度も一部に含まれているが、これらの尺度によって友人関係と恋人関係の特徴を多面的に把握することができたものと考えられる。以下、人格発達と友人・恋人関係の特徴との関連に関する仮説について考察する。

友人関係と人格発達

まず、自我同一性と親密性との関係については、2つの親密性尺度ともに MEIS の4つの下位尺度と中程度の相関を示し、自我同一性達成度が高いほど親密性達成度も高いことが示された。また、親密性は友人関係におけるコミットメント、共感、親和、互助などの特徴と中程度の相関を持ち、同性友人との間に親密な関係を築けることが親密性の達成を促進することも示されている。重回帰分析の結果によれば、自我同一性の達成度と友人関係の共感的・親和的特徴の程度から大学生の親密性尺度得点の分散の約70%が説明される。このように親密性の発達には同一性からの影響だけでなく、同性友人関係の経験も大きな影響を与えており、大学生になるまでの友人関係形成スキルや交友経験のあり方が成人になってからの人間関係にも影響を与える可能性があることが示唆される。親密性は成人前期にかけて発達していくことが予想されるが、大学生においても個人差が生じていることが明らかにされた。

このように親密性の達成に対して自我同一性と友人関係は独立した影響を与えていたが、本研究では自我同一性と友人関係の親密さとの関連性についても検討を加えた。多くの先行研究では友人関係が自我同一性に影響を及ぼすと仮定しているが、本研究では、両者は独立しているか、あるいは自我同一性が友人関係の親密さに影響を与えるという仮説のもとに検討した。共分散構造分析の結果は、わずかな差で両者が独立であるとする仮説を支持した。また、親密さとは別に、友人関係における同調傾向や比較といった特徴は自我同一性の達成度による負の影響を受けていることが示された。このような結果は、友人関係の親密さは自我

同一性とは異なる過程を経て発達することを意味している。サリバンが述べているように、このプロセスは児童期における仲間集団の経験にまで戻ることができるであろう。また、その一方で心理社会的同一性や自己斉一性・連続性の達成度が低いと、自信の低さや一貫性のなさが原因となって同調傾向や劣等感・羨望といった友人関係におけるネガティブな経験が生じやすくなり、さらにそのことが親密性の発達を妨げる要因にもなる。したがって、自我同一性は直接的に親密性の発達に影響を与えるだけでなく、身近な人間関係のネガティブな側面に影響を与えることで親密性に対して間接的な影響も与えているのである。

恋人関係と人格発達

恋人関係と人格発達との関連については、恋人の有無による比較と、恋人がいる人の中での両者の相関分析の2通りの分析によって検討した。なお、本研究の対象者の中で恋人がいると回答した者の比率、男性25.9%、女性34.5%は他の大学生を対象とした類似した調査の結果と近い値を示しており、きわめて標準的である。男性については相対的に対象者数が少なくなるが、平均の差の検定には十分耐えられるものと判断した。

まず、各尺度得点について恋人有り群と無し群で平均の差を検討した。その結果、親密性尺度は恋人有り群で無し群より有意に高かった。このことから、親密性が高いほど恋人がいる確率も高いと言える。また、MEIS では自己斉一性・連続性尺度と心理社会的同一性で恋人有り群の優位が示された。恋人がいる人ほど自信を持ち一貫した行動ができることが示唆される。

恋人関係尺度と人格発達尺度との相関分析では、2つの親密性尺度の違いが明らかになった。友人関係の特徴との関連では、EPSI 親密性尺度も谷・原田親密性尺度も類似した傾向を示したが、恋人関係については関連の強さが異なっていた。具体的には、谷・原田親密性尺度は恋人関係尺度の多くの下位尺度と正負の有意な相関が認められたのに対して、EPSI 親密性尺度では呑み込まれ不安以外の尺度と弱い関連しか認められなかった。エリクソンの主張する親密性は異性との親密な関係性に関わる概念であることから、この結果は EPSI 親密性尺度の妥当性を疑わせるものと言える。

谷・原田親密性尺度と男女ともに一貫して正の相関を示したのはコミットメント、親密度、開示理解、支援受容であり、これらは恋人との間に親密で信頼できる共感的関係があることを示している。なお、信頼準拠には性差があり、女性だけが親密性と正の相関を示した。これは、恋人に全面的信頼を寄せることが女性では親密性の現れであるが、男性では親密性とは無関

係であることを意味している。これまでも親密性における性差の問題は指摘されてきたが、本研究においては信頼準拠尺度ではっきりとした性差が見られた。

呑み込まれ不安と恋人比較は親密性尺度と有意な負の相関を示し、これらの特徴は親密性が未達成であることを示していると解釈できる。この2つの尺度は自我同一性尺度との間に負の相関を示している点でも共通している。エリクソンは自我同一性が未達成なまま他者と親密な関係になると、自他融合状態への恐怖や自己喪失不安が生じると述べており、呑み込まれ不安尺度はこの恐怖・不安の強さを表している。また、恋人比較の結果は友人関係尺度の友人比較と同様に、自分に対する自信のなさから起こる劣等感や引け目を示していると考えられる。

関係性尺度の二次因子分析の結果と、因子得点と人格発達尺度との相関分析の結果は、以上の結果を反映している。大学生において、恋人関係の親密さと友人関係の親密さどちらも親密性の発達と関連しているものの、別個の因子として抽出される独立した特徴である。なお、2つの親密性尺度のうち谷・原田親密性尺度の方がどちらにも共通する親密性の特徴を捉えていた。他方、自我同一性は友人および恋人関係の親密さとは直接的な関連を持たないことが示唆された。しかし、親密な関係における同調傾向や不安や懸念は自我同一性の拡散状態によって生じるものと考えられる。

展 望

本研究では、青年期後期から成人前期にかけての発達課題との関わりから、大学生の人格発達と親密な人間関係の特徴との関係について検討を加えたが、恋人関係について十分に検討できず未解明のまま残された問題がある。まず、本研究では人格発達と恋人関係の関連について、恋人の有無による差の検定と、恋人がいる人だけを対象とした相関分析によって検討した。しかし、恋人がいない人における人格発達の問題は全く未解明のままである。恋人有り群の中でも親密性の個人差が恋人関係の特徴と関連を持っていたように、恋人無し群の中にも親密性の個人差があり、それが過去の恋愛経験、恋人関係以外の対異性関係、あるいは恋愛に対する態度などに影響を及ぼすことが考えられる。このような恋人関係の中に直接示される特徴ではない形で親密性の達成状態を把握する工夫が求められる。

さらに性差の問題も十分に検討できなかった。本研究では親密性に関する共分散構造分析において、友人懸念傾向（同調傾向と友人比較）が親密性の達成度に及ぼす影響に性差があり、男性に認められた親密性への負の影響が女性では認められなかった。また、恋人

関係尺度の信頼準拠にも大きな性差が認められた。これは親密な人間関係における同調や比較の持つ意味が男女で異なっている可能性を示唆している。つまり、女性が男性パートナーに対して全面的な信頼を寄せ、相手を立てて自分が一歩引いて同調することは、親密性の達成とプラスの関係を持つ行動である可能性がある。しかし、同じことを男性が女性パートナーに対して行った場合は、親密性よりむしろ自我同一性に問題があるとみなされるであろう。一般に、関係の親密さの程度を比較すると男性より女性の方が親密度が高いとされるが、今後は親密とされる関係の質的な面にも着目して性差を検討していく必要がある。

文 献

- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company. (仁科弥生 (訳) (1977, 1980). 幼児期と社会1・2 みすず書房)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company. (小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton & Company. (岩瀬庸理 (訳) (1973). アイデンティティ 金沢文庫)
- Erikson, E.H. (1982). *The life cycle completed*. New York: New York: W. W. Norton & Company. (近藤邦夫・村瀬孝雄 (訳) (1989). ライフサイクル, その完結 みすず書房)
- 古屋 健 1999 青年期における疎外感の対人的規定因について 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, No.48, 383-407.
- 金政祐司・大坊郁夫 2003 愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係 感情心理学研究, 10, 11-24.
- Brehm, S. S. 1985 *Intimate relationships*. New York: Random House.
- Hatfield, E. 1984 The dangers of intimacy. in Derlega, V. (ed.), *Communication, intimacy, and close relationships*. Orlando, Florida: Academic Press, 207-220.
- 金子俊子 1995 青年期における他者との関係のしかたと自己同一性 発達心理学研究, 6, 41-47.
- Levitz-Jones, E. M. & Orlofsky, J. L. 1985 Separation-individuation and intimacy capacity in college women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 156-169.
- 松下姫歌・吉田 愛 2009 大学生における友人関係と自我同一性との関連 広島大学心理学研究, 9, 207-216.
- 宮下一博 1998 青年の集団活動への関わり及び友人

- 関係とアイデンティティ発達との関連 千葉大学教育学部研究紀要. I, 教育科学編 46, 27-34.
- 宮下一博・渡辺 朝子 1992 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部研究紀要. 第1部 40, 107-111.
- 中西信男・佐方哲彦 2001 EPSI—エリクソン心理社会的段階目録検査— 上里一郎 (編), 心理アセスメントハンドブック 第2版, 西村書店, 365-376.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- Orlofsky, J. L., Marcia, J. E., & Lesser, I. M. 1973 Ego identity status and the intimacy versus isolation crisis of young adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 27, 211-219.
- 谷 冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 谷 冬彦・原田 新 2011 新たな親密性尺度の作成 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要, 5, 1-7.
- Sullivan, H. S. 1968 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: W. W. Norton & Co Inc.
- Tesch, S. A., & Whitbourne, S. K. 1982 Intimacy and identity status in young adults. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 1041-1051.
- Whitbourne, S. K., & Tesch, S. A. 1985 A comparison of identity and intimacy statuses in college students and alumni. *Developmental Psychology*, 21, 1039-1044.
- 安井圭一・谷 冬彦 2008 現代青年の友人関係と自我同一性との関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 17, 212-213.

附 記

本研究は立正大学心理学研究所研究助成 (2012年度～2014年度共同研究)「近年の若者の対人関係特性の社会心理学的研究」(川名好裕・齊藤勇・古屋健・八木義彦・高橋尚也)を得て実施された。

要 約

本研究では、青年期後期における人格発達と友人・恋人関係の特徴との関係について検討した。人格発達については、424名の大学生を対象に、自我同一性を谷の MEIS により、親密性を EPSI および谷・原田の尺度により測定した。相関分析および共分散構造分析の結果、親密性は自我同一性が達成され、友人関係が親密などと高いこと、また友人関係の親密さは自我同一性発達とは弱い関連しかないことが示唆された。また、恋人のいる学生はいない学生よりも親密性得点が高く、また恋人がいる人の中では関係の親密さは親密性発達と有意な関連を示した。自我同一性の未達成の状態は、友人および恋人との親密な関係における同調傾向や不安・懸念を高めていた。

キーワード：Erikson、自我同一性、親密性、友人関係、恋人関係